

官能人肉食小説

# 家畜



大黒達也

## 『家畜』

### 一・あらすじ

ノンフィクション作家である加納圭吾は、中国奥地に存在すると言われる人肉売買組織を取材中行方不明となる。

一方、圭吾の弟である一也は、北海道日高町の山奥に人間牧場を作り、誘拐した美女達を食肉用に飼育する。

### 二・登場人物

#### 加納 圭吾（カノウ ケイゴ）

日本では名の売れたノンフィクション作家。中国で取材中行方不明となる

#### 陳（チン）

世界的な人肉売買組織の長老

楊（ヨウ）

陳の部下であり、人肉工場の工場長。バイセクシャルであり、美しい容姿の中に、悪魔的な心を宿している

加納 一也（カノウ カズヤ）

加納 圭吾の弟。北海道日高町の山奥に人間牧場を作る。美女達を誘拐し、食肉用に飼育する

加納 礼子（カノウ レイコ）

一也の妻。美しい容貌肢体の持ち主であり、バイセクシャル。食肉用の女達を弄ぶ

その他大勢の美女達

人肉売買組織によって拉致され陵辱の末に、捌かれ調理される女美女達。

三・目次

第一章 食肉工場

第二章 山荘

第三章 スタジオ

第四章 狩猟

第五章 真弓

第六章 飼育

第七章 人肉売買

第八章 悪魔の夕食会

第九章 工場見学

第十章 裏切り

「本編」

第一章 食肉工場

南国の突き刺すような紫外線が、ダークグレイ色のカーテンから漏れていた。ベッドサイドのナイトテーブルに置かれた目覚まし時計が、午前十時を示していた。

ここは、東シナ海に浮かぶ中国海南島の最北端に位置する海口の街だ。俺は街の中央に位置するリゾートホテルに宿泊していた。昨夜の深酒のため、頭の芯がずきずきと痛んでいた。隣のベッドではグラマーな白人女が、口を空けてぐっすりと眠り惚けていた。確か、キャサリンとかいう名前だった。本名かどうかわからない。どうせ行き付けのバーで知り合った女だ。

もう一度、目覚し時計を見た。目覚めてから三十分が経過していた。約束の時間まで後、三十分しか無かった。

女を揺すった。「ああん……」と甘い喘ぎ声を発し、

また眠りについた。俺は仕方なく立ち上がり、バスルームに向かった。トイレで小用を済ませ、シャワーの前に立ち、蛇口を一杯に捻った。冷水が迸り、全身に衝撃が走り抜けた。やがて、ぬるま湯になり、そして熱い怒涛となって身体を叩いた。

思わず喘ぎ声を漏らしていた。ボディソープを全身に塗りつけ、シャワーを注ぎかけ昨夜の余韻を一気に洗い流した。

「朝飯は抜きだな」

独り言を呟きながら、シャワールームを出て、洗面台の前に立ち、全裸のままへアドライアーをかけた。髭を剃り、歯を磨いてから、バスルームを出た。その時、身体の芯を貫くような悪寒が背筋を走りぬけた。ベッドルームで、みすばらしい格好をした中年男が、素っ裸で

眠り続けるキャサリンの寝顔を覗き込むようにしていた。  
気配に気づいたのか男が振り返った。

「約束の時間だ。迎えに来た」

中年男が、地の底から響くような声の日本語で囁いた。  
俺はとっさに壁掛け時計を見つめた。約束の時間まで、  
まだ十分あった。

「俺の時計でだ」

中年男は、腕時計を覗き込みながら、薄ら笑いを浮か  
べた。

「……」

「この女は、あんたの恋人か何かか？」

「いや、単なるいきがかりだ」

「貰っていいか？」

「好きにしろよ」

俺の返事が終わらないうちに、男は胸ポケットから小さな子瓶を取り出し、中に入った透明の液体をキャサリンの口に注ぎ込んだ。キャサリンがせき込み、目を開けた。中年男と目が合い、叫び出そうと口を開いたが、そのまま目を閉じ軽い躰を立て始めた。男はズボンの後ろポケットから取り出した携帯電話に向かって、広東語らしい言語で、何やら早口でわめき立てた。

五分後、ドアをノックする音が聞こえ、続いて若い東洋人の男が、洗濯物を入れるキャスター付きワゴンを押して入ってきた。男達は全裸で眠り続けるキャサリンを抱え上げ、ワゴンに押し込み、上から洗濯物をかぶせた。

「そろそろ行こうぜ。旦那」



中年男が気味の悪い笑みを浮かべながら言った。

「ちよつと、外で待っていてくれ。手荷物があるんだ。

それにこの格好じゃな」

二人は無言で、ワゴンを押しながら外に出ていった。

俺はベッドに走り寄り、枕の下から、黒光りする自動拳銃を取り出した。ベレッタ九二F、アメリカ軍が採用している軍用拳銃だ。総弾数十五発、対人用としては強力な九ミリパラグラム弾を発射する。それを、ベッドの上に置いて、近くの床に脱ぎ捨ててあったジーンズとTシャツを身に付けた。ベルトを付けて、ベレッタを後ろに差し込んだ。それから薄手のブレザーを羽織、下着類や洗面用具を入れたスーツケースを手にして部屋を後にした。

外では二人が、俺を待っていた。若い男がワゴンの中に片手を突っ込み、好色な笑みを浮かべながら、動かし  
ていた。キャサリンの裸身を眺めているのだろう。

「あんたは福の神だ。大金と美味そうな美女をくれた」

「アジトに案内してくれるのか？」

「もちろんだ。地下にバンが止めてある。目的地までは丸一日かかる」

地下駐車場には、エレベータで降りた。誰の目にも止まらなかった。駐車場の奥に黒塗りのバンが止まっていた。男達はバンの後ろ側に回った。そこはどの位置からも死角となっていた。若い方の男がワゴンに両腕を突っ込み、昏々と眠り続けるキャサリンを掴み出した。薄暗い中であってキャサリンの抜けるような白い柔肌が妖しく輝いていた。

「この女いくらになるかな？」

「五百万円といったところだ」

二人はひどい訛りのある日本語で話していた。

「旦那、後部席に乗って下さい」

年配の男が、二人の様子を呆然と見詰める俺に言った。

車内はごく普通だったが運転席とは壁で仕切られ、窓も黒く目張りが施され、外の様子をまったくといっていいほど見ることができなかった。慌ただしく、キャサリンが最後部の座席に運び込まれた。年配の男と一緒に乗り込み、キャサリンを仰向けに寝かせた。豊かに盛り上がった両乳房を、両手で揉み始めた。

「運び屋の役得だね。気にしないでくれ」

むっちりとした太腿を押し広げ、サーモンピンクの膣を舌で舐り始めた。昨夜俺が責めぬいた膣を美味そうに

舐めていた。車は静かにスタートした。どこに向かって  
いるのかさっぱり見当がつかなかった。男は、膣に満足  
したのか、愛液まみれの顔を歪めながら、キャサリンを  
うつ伏せにして、白くすべすべの大きな尻に齧り付いた。  
「旦那知っているかい？女のここは脂が載って最高に美  
味なんだよ」

男は狂ったような勢いで尻を舐めていた。ホテルの地  
下駐車場を出てすぐに船に乗ったようだった。

それから二時間ほど、車は揺れ続けた。下船してから  
二十時間、車は走り続けた。小用は用意されていた小ビ  
ンに直接行った。男達は運転を交代する度に、キャサリ  
ンの裸身を責め抜いた。キャサリンは走り出して二時間  
ほどで目を覚ました。最初、自分の股間に纏わりつき、

臆を舐め回している男の頭を放心した目つきで見下ろしていたが、俺に気づき大きな声を上げた。

「圭吾。何なのこれ？冗談のつもり？」

言葉に刺が含まれていた。

「いや。冗談ではない。お前は生け捕りにされたんだ。

もう助からない」

「何ですって！どういうこと………？」

キャサリンが股間から離れようとしない男の髪を、思いつきり引っ張った。

「糞アマ。何しやがるんだ！」

中年男が起き上がり、キャサリンの柔らかい腹部に拳を打ち込んだ。さらに頬に平手打ちを食わせ、臆臆としたキャサリンの喉を片手で締め上げた。空いている方の手で、懐からコマンドナイフを取り出し、頬を叩いた。

「許して…………。苦しい…………」

「お前は牝ブタなんだ。生かすも殺すも俺様の自由なんだぞ。わかったか？」

キャサリンが目いっぱい涙を溜めながら、何度も頷いた。

「そうか。なかなか、聞き分けがいいな。さあ。さっきの続きだ。股を開くんだ！」

キャサリンは命令に従い、男の頭をむつちりとした太腿で挟み込んだ。顔を両手で覆いながらさめざめとした声で泣き始めた。俺の方を決して見ようとはしなかった。俺は、男に貰ったウイスキーのボトルを抱え、うとうとと、まどろんでいた。

中年男に交代して、若い方がキャサリンの尻を舐め上

「じゃ。ここでするんだな」

「いえ……………」

「大きい方か？」

「ねえ。お願いトイレに行かせて？」



げていた。男は、プラスチック製の洗面器を、取り出し、  
キャサリンをその上に跨らせた。俺はその様子を、まじ  
まじと見詰めていた。美しい女が小用を足すのを直に見  
るのは始めてのことだった。

「見ないで。お願い」

「旦那。遠慮することないよ。もっと近くによりなよ」

俺は席から離れ、キャサリンの前に座り、股間に顔を  
近づけた。男はキャサリンの背後から、よく見えるよう  
に太腿を広げた。サーモンピンクの膣が剥き出しにされ  
た。褌がピクピクと蠢いていた。

「嫌！出ちゃう！」

最初、チヨロチヨロ流れていたが、途中から勢いを増  
して迸り出た。飛沫が顔にかかったが不快な気分ではな  
かった。キャサリンはぐったりとした上半身を男に任せ



ていた。男はキャサリンの乳房を片手で掴みながら、空いている方の手を迸りでる小水に浸した。

小用が済んだ後、男は濡れタオルで、キャサリンの股間を丹念に拭いた。それから、キャサリンを脇にうつ伏せに寝かせ、小水の入った洗面器を両手で持ち上げた。おもむろに、それを飲み始めた。

「若い女は小便まで美味いんだよ。旦那も飲むかい？」

「いや。俺はいい。遠慮しておく」

「俺達は、水が無くなると、こうして女達の小便を飲むんだ」

男は小便をキレイに飲み干してから、再びキャサリンの尻を舐め始めた。

「おい。俺もやっつていいか？」

男が愛液に塗れた顔を上げた。

「いいよ。旦那は前から入れなよ」

狭い車中で、俺達は、キャサリンの裸身をサンドイッチにして、前後から貫いた。膣内は、愛液でどろどろになっていた。木目細かな襷が、亀頭を包み込み締め上げた。腰を使いながら、目を閉じたキャサリンの舌を吸い出して存分にしゃぶった。俺は、何時の間にか、倒したシートの上で熟睡していた。

頬に伝わるそよ風で目が覚めた。何時の間にか、目張りをされた窓が開け放たれていた。窓外にはうつそうとした広葉樹林と針葉樹林が混在する森が広がっていた。

「目が覚めたかい。もうすぐ着くよ」

中年男が、背後からキャサリンの尻を抱え、腰をゆっくりと動かしていた。それから五分ほど走り続けた時、

道の両脇が急に開けた。森が消え、木々がまばらになった。川幅五メートルほどの濁流に掛けられた木製の橋を渡り、車は止まった。ドアが外から開けられた。

「着いたぜ。旦那」

俺は、ゆっくりとした動作で車を降りた。薄もやの中、目の前に、煉瓦でできた平屋立ての大きな家が二棟立っていた。キャサリンを抱えた若い男が、そのうちの一棟に向かって歩き出した。

「旦那はこっちだ。長老がお待ちかねだ」

中年男が、もう一棟を指差し歩き出した。俺は後に従った。歩きながら香ばしい匂いを嗅いでいた。キャサリンが連れて行かれた家の大きな煙突から白い煙が出ていた。

「いい匂いがするな」

「ああ。あれか？薫製を作っているんだ」

「薫製？」

「今にわかる」

男は謎めいた笑いを浮かべた。

長老と呼ばれる男は、背が低く、目ばかり、ぎよろりと大きい東洋人だった。年の頃は、五十代すぎといったところか。白髪交じりの髪に脂ぎった顔立ちをしていた。

「加納さん。ようこそいらっしやいました。お待ちして  
いましたよ。どうぞお掛けください」

「始めまして。日本語がお上手ですね」

俺は、すすめられた籐の椅子に腰掛けながら、答えた。

「戦前には、日本人の世話になっていました」

「戦前ですって！失礼ですがお幾つになられるのです

か？」

「今年で八十になります」

どう見ても、八十のご老体には見えなかった。

「早速ですが。ご入金有り難うございました。これから一週間あまりですが、じっくりと取材を続けてください。いい本が書けるといいですね」

俺は、日本ではノンフィクション作家として、少しは名が通っていた。

「有り難うございます」

「ところで、お腹が空いていませんか？美味しい生ハムがあるんですよ」

長老はそういいながら、パチンと指先を鳴らした。ここに案内してくれた中年男が現れ、手に持っていた長さ八十センチくらいの紙包みをテーブルに載せて出ていっ

た。長老が包み紙を開いていった。中から、人間の片足が出てきた。長老は、懐から1枚の写真を取り出し、黙り込んだ俺に手渡した。写真には、まな板のような台に寝かされ、全裸にされた美しい白人女が、今まさに足を切断されようとしている光景が映し出されていた。

「どうですか？いい女でしょう。美しい女しか食う気になれませんからね」

俺は写真に映っている女をまじまじと見つめた。流れるような金髪を肩まで伸ばし、顔だけではなく、肢体も完璧なまでに美しかった。仰向けの姿勢でも盛り上がっている乳房は、形がよく軟らかそうだった。

「これが、この女性から、切り取った足だと言うのですね？」

「名前は、確か、エミリーという名前でした。二十歳の

アメリカ娘で、観光旅行先で我々に捕獲されたのです」

長老は話しながら、ナイフで肉を薄く切り、皿に載せ俺の前に置いた。

「さあ。どうぞ。遠慮なさらずに」

「ですが………。始めてなもので」

「そうですか？」

長老は立ちあがり、片足を引きずるようにして、棚に近づき1本のボトルと二ケのコップを両手に取り、また席に戻った。ボトルに入った透明の液体をふたつのグラスに並々と注いだ。

「ジンです。強い酒だが、食欲を誘います」

俺は、長老が差し出したグラスを、無言で受け取り一気に飲み干した。喉の奥にヒリヒリという痛みを覚えた。

「お強いですね。いかがです。もう一杯？」

俺は勧められるままにグラスを空けた。次第に空腹感が湧きあがってきた。そう言えば昨夜から何も食べていなかった。俺は何時の間にか、皿に載せられた生ハムを手を取っていた。それを口に運んだ。蕩けるような肉の甘みが口中に広がった。癖が無く、まったりとしていてこれまで食べた肉の中で最高の味わいだった。

「お分かりでしょうか？この世で最高に美味なのは、女の柔肉だということが。これは禁断の味であり、究極の美食なのです」

「もう少しいただけませんか？」

「どうぞ、どうぞ」

長老は柔らかな笑みを浮かべながら、数枚の薄肉を切り取り皿に盛った。

「調理法は、いくらでもあります。ご滞在中に楽しんで



もらいます」

俺は、貪るように生ハムをほお張った。これが人間の肉なのか。中国には古代から人肉を食したと思われる記録があるほどだ。特に若い女の肉は美味であると言われるていた。

「食べたなら、工場を案内しますよ」

それから、また指先をパチンと鳴らした。今度は、青色の作業着を着た若い女が入ってきた。

「工場長の楊（ヨウ）です。一緒に案内します」

紹介された女はペコリと頭を下げた。化粧はしていないが、美しい顔立ちをしていた。作業着の前ボタンが胸の膨らみのためにはちきれそうになっていた。

そこは、レンガが剥き出しになった二十畳ほどの部屋

だった。窓は北側に面した壁に一個所あるだけで、照明は100Wの裸電球のみ。薄暗い感じの部屋だった。部屋の中央に縦二メートル幅一メートルほどのテーブルがあり、全裸姿のキャサリンが横たわっていた。目を閉じ、静かな寝息を立てていた。薬で眠らされているようだ。

薄暗い室内で、雪のように白く美しい肢体と豊かな金髪が、裸電球の微かな明かりで浮き上がって見えた。テーブルの側には薄汚れた白衣を着て、銀縁メガネをかけた三十代くらいの男が、注射器を手に持ち立っていた。

「頂いた女の検査をしているところです。病気を持っていないかどうか、必ずチェックします。何と言っても品質が重要ですから」

男が、注射針を、キャサリンの腕に差込、採血を始めた。

「ちよつと。いいかな鈴木先生？」

長老に声をかけられた男が顔をこちらに向けた。

「今、お客さんをご案内しているところです。ところで女はどうですか？」

「心拍数、血圧ともに異常ありません。どうです。この肌の色艶。乳房の盛り上がりや尻のかたち、どれをとつても極上です」

男が高いトーンの声で答えた。

「ちよつといいですか？」

長老が私の手を取り、キャサリンの側に近づいた。鈴木と呼ばれた男が脇に退いた。

「女の肉でどこがもつとも美味だと思います？」

「……………」

「まあ。味覚はそれぞれなので……………。ただし、人氣が

高いのは、乳房、尻肉、太腿です。臙肉も根強い人気がありますね。私は乳房と腿肉のシチューが好物ですが……」

長老はキャサリンの盛り上がった乳房を鷲掴みにした。それから下半身の方に移動して、太腿を押し開いた。きれいなサーモンピンク色をした臙とアヌスが剥き出しになった。ペンシルライトを取り出し、豊かな恥毛を指先に絡め、さらに花卉を開き、内部を照らし出した。

「ここは珍味です。酒のツマミにしたら堪えられません。こうやって捌きます」

長老は指先を臙の端の部分に走らせた。そのまま、アヌスに滑り込ませ根元まで押し込んだ。それを抜き取り、ぺろりと舐めた。

「女の身体は捨てるところがありません」

そう言いながら、キャサリンの腰の下に手を差し込み、うつ伏せの姿勢にした。見事に盛り上がり、剥き卵のように白く滑らかな尻が現われた。

「どうですか？この美しさ。若さが凝縮しているでしょう？ここはステーキにして食します。生でもいいけますが」  
雪のように白く絹のように滑らかな肌を持った尻の膨らみを手で撫で摩り、目を閉じて尻の膨らみに頬ずりした。

「感触も非常に滑らかだ。普通、白人の女は鮫肌が多いのですが、日本娘にも負けないようですね。ここは十分に脂がのっついて、あなた方日本人が好むオオトロの甘みにもひけはとりませんよ」

両手で尻の双球を押し広げアヌスを剥き出しにした。  
「見てください。アヌスのきれいなこと。排泄行為以外

ほとんど使用していないようです。ここから鉄串を刺して焼いてもいいですね。その前に使わせて貰いましょう」  
長老が、尻の合間に顔を押し込み、舌でアヌスを舐り始めた。

「ああ……」

キャサリンが喘ぎ声を漏らした。長老が顔を上げた。

「お目覚めかな。鈴木先生。大人しくするように言ってください」

「ここは何処？私に何をしたの？圭吾。貴方ね？教えてちょうだい！」

その時、鈴木が目覚めたキャサリンに近づき、手術用メスを首筋に当てた。

「静かにしろ。ちよつとでも動いたら抉るぜ」

ドスの利いた低い声で耳打ちした。キャサリンは大き

な瞳に、いっぱい涙を溜めながら大きく頷いた。長老はがくがくと震えるキャサリンのアヌスを再び、舐り始めた。口を動かしながらベルトを外し、ズボンを膝まで脱いだ。下着ははいておらず凶凶しく長大な男根が現れた。それから、上体を起こしキャサリンのアヌスにそれをあてがった。

「加納さん。貴方もいかがですか？穴ならまだありますよ」

そう言っで一気に貫いた。

「うっ……。痛い。止めて！」

アヌスを貫かれたキャサリンの身体が大きく仰け反った。

「助けて。圭吾。お願い！」

俺の分身は極限まで、猛り狂っていた。すすり泣くキ

ヤサリンの顔を両手で、しっかりと固定し、魅力的な唇に押し付けた。

「啞えるんだ。キャサリン！」

「むぐ……」

口内は暖かく、包み込んでくる舌の感触が堪らなかった。豊かな金髪を鷲掴みにしながら腰を動かした。

「ここが、洗浄室です。身体検査を終え、買い手が決まった牝ブタはここで、身体の内外を洗浄されます」

検査室の次に連れて来られたのが、隣に位置する洗浄室だった。ドアを開けてすぐに、小毬のような豊かな乳房を持ったアジア系の女が、部屋の中央に置かれた流し台の上に、四つん這いの姿勢になっている光景が飛び込んできた。高くあげられた尻の真後ろに、青い作業着を



着たアジア系の男が、ホースをアヌスに差し込もうとしていた。

「痛い！お願い。許して」

女が日本語で叫んだ。男は、慣れた手付きで、ホースを差し込み、栓を捻った。

「うっ……」

女の腹部が、膨張した。女は美しい顔に苦悶の表情を浮かべた。

「王。真弓の買い手が決まったのか？」

「はい。フランスのレストランから今朝、注文がありました」

「幾らで売れた？」

「十万フランです」

「いい値がついたな。で、生きたままか？それとも捌い

て渡すのか？」

「急いでいるようで、今回は捌いて送るように指示がありました」

「そうか。続けてくれ」

二人は、加納に配慮してか、日本語で会話した。

「加納さん。貴方についてはいますよ。この日本娘は、旅先で捕獲されたのですが、今朝、買い手が決まり、本日中に解体して、フランスに空輸することになりました。

これから、つぶして肉にします」

「日本娘？」

俺の声は、娘のあまりの美しさに上ずっていた。流れるような長い黒髪、細面の顔に切れ長の二重瞼と形のいい鼻を持ち、モデルと言っても通用する容貌を持っていた。

「ええ。まだ、二十歳の学生で、友人と上海を旅行中に捕獲されました。日本の女は、肌がきれいで、肉質もよく非常に人気があります」

真弓は、美しい顔に苦悶の表情を浮かべ叫んだ。

「トイレに行かせて！」



作業員がバケツを片手に持ち、真弓の横に立ち、それを尻に押し当てた。空いている方の手で真弓の軟らかな腹部を揉みしだいた。

「止めて！出ちやう！」

ブルブリという排泄音とともに室内に異臭が広がった。

「お………。あ………」

真弓は重たい呻き声をあげながら、アヌスから液状になった排泄物をひじり出していた。すべてを放出し、ぐったりと弛緩した真弓の身体にホースのお湯が注ぎかけられた。

「嫌！痛い！」

作業員が、真弓のアヌスに指先を押し込み、手首まで強引に捻じ込んだ。仰け反り苦悶の叫びをあげる真弓を無視して、何かを探るような手付きで、手先を動かして

いた。指先がアヌスから、引き抜かれた。その手には黒い宿便が握られていた。再びホースを差込、直腸内部を洗淨した。最後に指先を差込、抜いた指先の匂いを確認し、アヌスに鼻を押し付け、匂いを嗅いだ。

アヌスの次は、同様の方法で膣の洗淨が行われた。身体の内側を洗淨した後は、ボディソープを染み込ませたスポンジで全身を撫でるように洗った。洗淨を終え、作業員は真弓をキヤスター付きワゴンにのせ、部屋を出ていった。

「あの牝ブタは、これから特殊な薬液に入られます。薬液には肉を柔らかくする効果があります。そうですね。後一時間はかかりますので、他を見ておきましょうか」

ドアを開けたとたん、隠微な香りが鼻孔をくすぐった。

部屋の中央では、全裸の女達が、ひとりの女を取り囲み、手や口を使って弄んでいた。弄ばれている女はキャサリンだった。全裸で四つん這いにされ、盛り上がった尻の合間には、女の顔が押し付けられ、豊かな乳房を吸われ、揉まれていた。目に大粒の涙を浮かべ、肉感的な唇には、他の女が吸い付き音を立てて吸っていた。どの女も皆整った容貌肢体を持っていた。人種は多彩で白人、黄色人種、黒人とすべてが揃っていた。

「ここは、牝ブタの寝床です。買い手が決まるまでの間、ここで暮らします。食えることと寝ること以外することが無いので、新入りが入るとああやって弄ぶんです」

「ああ……………。いい……………。いく……………」

キャサリンが鋭い喘ぎ声をあげて背筋を仰け反らせた。床に腹ばいになって横たわるキャサリンの尻に、他の女

が張り付き舌を使い始めた。

「次に行きましょう」

次に案内されたのは、調理場だった。広さが二十畳ほどで、中央に長大なシンクが置かれていた。

「ここは、牝ブタの解体場です。うちは乳房や膾等の単品でも扱っていきまして、約二割の牝ブタはここで解体され、食品貯蔵庫に貯えられます」

「真弓もここで捌かれるのですか？」

「違います。真弓はスタジオで特殊な技術を持つ解体人に捌かれます」

「スタジオ？」

俺は我が耳を疑った。

「そうです。買い手には、牝ブタが処理されるプロセスもVTRに撮影し渡されます。まあ、食事時にVTRを



見ながら、牝ブタの柔肉を楽しむのだそうです」

その時、調理場のドアが開き、全裸の白人女を肩に担いだ作業員が現れた。白人女は美しい容姿に豊かなブロードの髪を持ち、四肢はきれいに伸びて、乳房や尻が豊かに盛り上がっていた。



でっぷりと太った中年の作業員は、俺達に軽く挨拶をして、女を巨大なまな板に降ろした。仰向けに横たえ、女の股間に顔を押し付け、舌で舐り始めた。

「ちようどいい。一匹を解体するようです」

長老が、目を輝かせた。それから女の側に行き、俺を手招きした。

「膣とアヌに指を入れなさい」

俺は言われた通りに従った。男が女から離れた。女の剥き出しにされたアヌと膣は舌による陵辱のためか、十分に潤んでいた。男は、棚から刺し身包丁を取り出し、女に近付いた。女の視線が鋭い光を放つ包丁に向けられた。目を大きく見開き、全身を震わせ始めた。

「ヘルプ ミー！」

開ききった太腿の間から尿が迸った。男は豊かな乳房

を片手で鷲掴みにして、感触を楽しんだ。それから包丁を女の首筋に当て、ゆっくりと刃を上下させた。女は額から大粒の汗を流し、身体を仰げ反らせ、全身を震わせた。刃先から真っ赤な鮮血が吹き出した。女が白目を出し、断末魔の唸り声をあげていた。膣とアヌスが俺の指先を強い力で締め上げ、小刻みに震えていた。

殴り付けられるような快感に襲われ、俺は、パンツの中に放っていた。虚脱感に襲われた俺は重心を失い、床に尻餅をついた。工場長の楊が近づき、俺のズボンとパンツを下げ、精液に塗れた男根を口に咥え音を立ててしゃぶり始めた。俺は逆らわず、口腔性交を続ける楊の長い黒髪を摩りながら、まな板の上で繰り広げられる惨劇を目の当たりにしていた。

作業員が、痙攣を続ける女の乳房を鷲掴みにして根元

から切り取った。それを脇においてあったボールに投げ込み、下腹部に包丁の切っ先を差込、慎重な手付きで臍を削りとっていく。腹部を縦に切り裂き、中に両手を差込み、血まみれの大腸を取り出した。慎重に他のポーに入れ、続いて肝臓や他の臓器を取り出した。大振りの中、華包丁で手首と足首を一気に切断し、背中に手を入れて持ち上げ、うつ伏せにした。沁み一つない盛り上がった尻の膨らみに包丁で切れ目を入れた。薄皮と黄色い脂肪層が切断され、脂ののった赤みの肉が見えた。見事な包丁捌きで、柔肉を削り取っていった。

## 第二章 山荘

そこは、日高山脈の奥深く、周囲を原生林に囲まれた場所であった。森を切り開いた一千坪ほどの空間に、一軒のコンクリート住宅がひっそりとした感じで建てられ

ていた。建物は、平屋建ての造りで、中央には百坪ほどの中庭が作られ、そこには縦横十メートル四方の屋外プールがあり青い水を満々とたたえていた。そこでは全裸姿の若い女達が、嬌声をあげ、ビーチボールと戯れていた。

プールサイドのサンチェアには、これもまた、一糸も身に付けていない若い女達が日光浴を楽しんでいた。女達は皆、背が高く、グラマーな肢体に美しい顔立ちをしていた。

その時、けたたましいサイレンが鳴り響いた。女達は皆、遊びを中断し、中庭に面した三つの部屋に二名ずつのペアで入っていった。各部屋では、昼食の支度が済んでいた。女達はそれぞれの部屋で、昼食が盛り付けられたテーブルに二人で向かい合って座った。三部屋のうち、

一部屋のテーブルには山盛りのフルーツと、少量のボンゴレが皿に盛られていた。他の部屋もメニューは、フルーツとスパゲッティだが、量が違っていた。ある部屋ではスパゲッティが多く、フルーツが少な目だったり、また別の部屋ではその逆であったりした。

一番目のフルーツが山盛りの部屋では、女達が不満そうな顔を浮かべていた。

「また、フルーツなの？ こう毎日じゃ好物も嫌いになるわ」

「そうね。ここに攫われて来てから、毎日、フルーツ攻めだものね」

向かい合った女達は、うんざりとした表情を浮かべながらも、メロンやブドウを食べ始めた。

「ねえ。京子。食事が済んだらどうするの？」

絵理が口元に笑みを浮かべながら、尋ねた。京子と呼ばれた女は、窓の外を眺めながら、

「そうね。プールも飽きたから、昼寝か、ビデオ鑑賞ね」と答えた。

「私も付き合っている？」

「絵理と私は同じグループじゃない。いつも一緒よ」

「じゃ。昼寝にしない？」

「いいわよ」

絵理は一杯に盛られたフルーツの山から一本のバナナを取り出し、テーブルの上に置き、意味深な笑みを京子に向けた。

「早く済ませましょう」

「そうね。昼食の時間は後、三十分だものね」

「そうよ。貴女の分は全部食べてね。そうじゃないとま



たお仕置きされるから」

二人は、無言でフルーツを口に運び始めた。六人の女達は皆、ここに拉致されて来たのだった。

ここに来るまでは、普通のOLや学生だった。ある日、街を歩いていたら近くに黒塗りのバンが、急停車して中に引き摺り込まれ、そのまま薬で眠らされた。気が付いたら、この家のベッドで寝かされていたというわけである。

既に1ヶ月以上が経過していた。ここがどこであるか、まったく分からなかった。ただ、真夏にも関わらず、朝夕の冷え込みようから北国か高原地帯であることは確かだった。当然、家から一步も外には出されなかった。というより、出口が見当たらなかった。唯一外界に通じる窓には、太い鉄格子がはめられ、その向こうには黒々と

した原生林が広がっていた。

女達は、拉致された当初、泣き喚き悲痛にくれていた。

悲惨な運命が待っているものと思っていた。しかし、一点を除き、ここの暮らしは快適といえた。家の中はどこも清潔に保たれていた。温度も二十四度に保たれ、裸に暮らす分には適温といえた。食べ物は十分与えられ、飢えることはなく、広大な地下室には、卓球やアスレチックなどのスポーツ施設、VTRやビデオプロジェクターが備えられたAVコーナーがあり、さらに天然温泉を引き込んだ浴室があり、サウナもあった。一階には図書室も備えられ、膨大な数の書籍や雑誌類を見ることができた。問題の一点とは、家主のことである。家主というより、彼女達に対しては、絶対権力を持つ、支配者といえた。彼らは二十代後半くらいの夫婦で、無口で暗い感じの

する夫の方は、百九十センチはある長身でがっちりとした体型をしていた。残忍な性格を持った妻の方も、大柄で百七十センチ以上の上背がありグラマーな身体つきをしていた。容姿も超がつくほどの美女であった。彼らが、女達の身の回りの世話をしていた。入浴後にはマッサージまでしてくれた。

問題なのは、夜だった。夕食を終え、入浴後になると、決まって六人のうち誰かが夫婦の部屋に呼ばれた。一人で呼ばれることもあれば二人の時もあった。部屋では夫婦が待ち構えており、部屋に入るや否や、二人に取り押さえられ、広大なダブルベッドに転がされた。それから後は、狂ったような陵辱の連続だった。最初の頃、女達は抵抗を試みたが、頑強な男の前では無力だった。

「絵理。もっと尻を上げるんだよ」

ベッドの上で四つん這いの格好をさせられた絵理の尻を覗き込む様にして、妻の礼子が冷たく言い放った。



絵理の前では、ベッドの横に仁王立ちになり腕組をした夫の一也が、黒々とした男根を含ませていた。

「もつと舌を使え。顎が外れるまでやるんだ！」

「一也。今日はどうやって料理する？」

礼子が一也を上目遣いに見つめた。

「お前が最初に口でいかせてやれ。それから浣腸して、吊るし上げて鞭打ちだな」

それを聞いて、絵理の裸身がビクリと揺れた。

「それにしても美味そうな尻なこと。惚れ惚れするよ」

礼子が絵理の尻の膨らみをペロリと舐めた。それから尻の合間に顔を押し付け、アヌスを舌で舐り始めた。絵理の白い尻が妖しく動き始めた。暫く、アヌスと膣を舌で舐め回した後に、礼子は愛液で濡れた顔を上げ、片手で絵理の尻を高く上げて、指先を膣とアヌスの両方に挿

入した。絵理の背中が仰け反り、喘ぎ声を漏らした。膣内と直腸内を指先でかき回した。ぐったりとした絵理を肩に担ぎ上げた一也が、妻の礼子と地下通路を歩いていた。絵理は、ここに来る前、礼子によって軽く首を絞められ、失神していた。

「どうやって料理する？」

「そうね。計画どおりステーキがいいな」

「このむっちりとした尻は丸ごとオーブンで蒸し焼きにしよう。何だか涎が出でてきたぜ」

一也が絵理の尻に頬摺りしながら言った。

「極上の柔肉よ。しかもこの三ヶ月、フルーツを大量に食べさせ、ビール風呂に入れて肉を柔らかくしたからね」

「南国に果物を主食とするコウモリがいるんだが、その肉がこれまた美味なんだ」

会話の途中で、鋼鉄製の扉に行き当たった。礼子が持っていた鍵で、扉を開けた。扉の先は、裸電球に照らされた暗い階段ホールとなっていた。その先は上へと続く階段が伸びていた。十三段の階段を上ると、そこには明るく広々とした空間が広がっていた。広さは三十畳くらいあり、南側の壁は、全面ガラス張りとなっていた。床には一辺が三十センチくらいの白い大理石が一面に敷き詰められた。部屋の中央には、一辺が三メートル以上ある二人がけの食卓テーブルが置かれていた。座席は向かい合う位置に置かれていた。その他の家具類と言えば、調度品や珍しい形をした酒瓶を飾ってあるサイドボードがひとつに、三十六インチ型のビデオプロジェクターだけだった。彼らは、そこを通り抜け、木製のドアを開け、中に入った。そこは広さが二十畳ほどの厨房だった。巨



大な鍋がひとつとフライパンが、ガスレンジの上に載せられていた。部屋の中央には、長さ三メートル幅一メートルほどの調理台が置かれていた。金属製の台の上には、厚さ五センチ、長さ二メートル幅一メートルはある木製のまな板が固定され、その周囲には溝が切られていた。

礼子が鍋に水を入れ、レンジに点火した。それから冷蔵庫から野菜を取り出しシンクで洗

い始めた。失神した絵理を肩に担いだ一也は、厨房の奥にあるドアを開け、中に入った。その部屋は、床がタイル張りとなっており、中央に産婦人科の診察台が一つ置かれ、壁際には、人ひとりが横たわれるほどの巨大なシンク置かれていた。一也は、肩に担いでいた絵理を、診察台に座らせ、四肢を椅子の足に皮紐で固定した。椅子の背もたれを倒し、両足を固定した部分を大きく開いた。

サーモンピンクの膾やアヌスが丸見えとなった。一也はそこに顔を埋め暫くの間、舌でアヌスを舐めた。それから顔を上げ、鼻歌を歌いながら、アヌスに人差し指を入れ、中を掻き回した。

「あああん……………」

絵理が目を覚ました。

「ここは……………。一也様ここはどこですか？どうして縛られているんですか？」

「ここかい？何て言ったらいいかな。洗い場というところかな」

「……………何をなさるんですか？」

「今にわかるよ」

一也は絵理のアヌスから人差し指を抜き取り、棚から太さ五センチほどの、ひまし油が満たされた浣腸器を取

り出し、アヌスにあてがった。ゆつくりとその先をアヌスに埋め込み、ピストンを押し込んだ。

「痛い。ああん……………」

一リットルはあるひまし油が、すべて挿入された。プラスチック製のバケツを尻の下に置いた。

指先を栓がわりにアヌスに差し込んだ。絵理は目を閉じ、眉間に皺をよせていた。下腹部が小刻みに震え出した。

「トイレに行かせてください！」

「牝ブタにトイレは必要ない。ここでするんだ」

一也はそういういながら、空いている方の手で、豊かに盛り上がった絵理の乳房を揉み始めた。

「ああ……………。駄目！出ちゃう」

一也が笑いながらアヌスから指を抜いた。ビリビリと

いう音が響きわたり、アヌスから黄色い液体が勢いよく吹き出し、続いて固形物がひじり出された。一也はバケツの中身を部屋の隅にある排水溝に流し込み、壁にかけられたホースを掴んだ。さめざめとすすり泣く絵理に、湯を注ぎかけた。浣腸は計五回行われ、最後には透明な液体しか出なくなった。浣腸の後に、湯を出し続けるホースの先端を、臍とアヌス交互に押し込み中を丹念に洗浄した。一也はぐったりとした絵理を抱え上げ、壁際のシンクに仰向けに横たえた。絵理の全身を洗剤とぬるま湯で洗い始めた。

「準備OKのようね」

一也の背後に、エプロン姿の礼子が立っていた。

「ああ。いつでもOKだ」

礼子は絵理の尻の下に手を差し入れ、白魚のような指

先をアヌスに指先を忍び込ませた。

「ああ……………」

絵理が尻をももぞさせながら、身悶えた。礼子は抜き取った指先の匂いを嗅いだ。

「そのようね。始めましょう」

一也は絵理を抱え上げ、礼子と肩を並べ隣の厨房に向かった。絵理を巨大なまな板の上に、うつ伏せに横たえ、肩を両手で抑えた。礼子が刺し身包丁と、大きな深鍋を持ち出した。刺し身包丁を目の当たりにして、絵理は叫んだ。

「何をするの！」

「これからお前を料理して食らうんだ。お前達はそのために攫ってきたのさ」

最初、意味がわからず、呆然とした表情を浮かべた。

すぐに、髪を振り乱し、泣き叫んだ。

「止めて！許して！」

「駄目だね。お前には毎日のようにフルーツを食べさせ、ビール風呂に入れたからね。きっと驚くような美味だよ。

この世で最高の食材さ」

礼子が、話しながら絵理に近づいた。

「あんた達は狂っている。正気じゃないわ！」

絵理は必死の表情を浮かべ、もがき始めた。その時、ガツンという感じで、一也が絵理のこめかみに拳を叩き付けた。「うっ」と呻き、動かなくなった。

「やるわよ」

礼子が、鍋を絵理の首に押し付け、刺し身包丁を首筋に差し込んだ。

「ギャー！」

絵理が両足をばたつかせながら、もがき苦しんだ。礼子が刺し身包丁を抜き取ると、真っ赤な鮮血が勢いよく吹き出し、鍋に溜まっていった。やがて絵理の動きが緩慢になり、そしてピクリとも動かなくなった。

「完全に血抜きをしてから、解体しましょう。その方が、甘みが出るわ」

二人は、ぐったりとした絵理の死体から手を離れた。

絵理の右手がテーブルのからはみ出し、だらんとした感じで垂れていた。

三十分後、一也と礼子は絵理の遺体を挟んで、包丁を片手に向き合っていた。全裸の絵理は、死体になっても美しく輝いて見えた。一也が絵理の盛り上がった乳房を鷲掴みにして、包丁で根元を切り始めた。すぐに血まみ

れの乳房を切り取り、脇に置いたボールに投げ入れた。

礼子は膣の削除に取り掛かっていた。絵理の片足を持ち上げ、自分の肩にかけて、開ききった股間に刺し身包丁を差込み、薄皮を剥ぐように膣を削ぎ取っていった。一也は、下腹部に包丁を浅く差込、皮を削ぐような感じで乳房の下まで切り込みを入れ両手で押し開き、色とりどりの内臓を驚掴みにして取り出した。腸、肝臓、子宮それに心臓以外の臓器はすべてゴミバコに投げ入れた。内臓をすべて抜き取った死体をうつ伏せにして、腰の部分と太腿の付け根から電動ノコギリを入れ、胴体を四つに分断した。礼子が切り取った太腿を、調理台に載せ、脂の載った太腿肉を削ぎ取り始めた。一也は、膣を削ぎ落とした尻の部分を、シンクできれいに洗い流した後、まな板に載せ、塩・胡椒を全体に万遍なくすり込んだ。指



先で、アヌスから野菜や米等を押し込んだ。腰の部分全体をアルミホイルで包み込み、オーブンに入れ、スイッチを押した。

その頃、礼子は、もう1本の太腿で生ハム作りに取り掛かっていた。切り取った太腿の部分を、テーブルに押し付けるようにして血抜きを始めた。血抜きの後は、天井から降ろした鎖に一日ほど吊るし、二週間塩漬けにして、水洗いした後に二ヶ月くらい寝かせ、さらにその後一年くらい乾燥熟成させればできあがりであった。腰から上の部分は、皮を剥ぎ取り、肉を削いでバラ肉にした。ソーセージにしてよし、ミンチにしてハンバーグにしても良かった。

礼子が油をしき熱く熱したフライパンに、塩・胡椒した絵理の臄肉を載せ炒めていた。細かく刻んだニンニク

を肉に振り掛けた。肉の焼ける香ばしい香いがキッチンに広がっていった。



午後六時三十分、辺りはとつぷりと日が暮れて、黄昏に包まれていた。山荘の別棟では、食堂で礼子と一也が礼服を着て、食卓テーブルに向かい合い座っていた。テーブルの中央には、絵理のキツネ色に焼きあがった尻が、大皿の上に載せられ湯気をあげていた。二人のすぐ前には、二つに切り分けた臍肉のステーキが、鉄皿の上でジュウジュウと音を立てていた。

「それじゃ。人肉ステーキ第一号を頂くとするか」

「食事は果物がほとんどと、ビールだけだったからね。」

ほっぺたが落ちるほど美味しいと思うわ」

「そうだろうな。礼子、尻肉を切り分けるから、お前の皿を渡してくれ」

一也は、丁度アヌスの部分から湯気があがりきれいに

焼きあがった尻肉にナイフを入れた。肉は驚くほどに柔らかく、刃先に何の抵抗も感じられなかった。中はきれいなピンク色をしていた。拳大にカットした尻肉を二皿に載せた。

「どっちから食べる？」

「私はお\*んこの肉。絵理のお\*んこは毎日のように舐めていたのよ」

礼子はアワビのようにも見える臍肉のステーキを、フオークとナイフでカットし口に運んだ。目を閉じて暫しの間、口内に広がる味覚を堪能した。

「どうだ？」

「最高よ。コリコリした歯ざわりが最高ね」

「そうか。じゃあ、俺は、尻肉から頂くか」

一也は、脂の載った尻肉をナイフで一口台に切り分け、

フォークで串刺しにして齧り付いた。肉質は柔らかく、牛肉のレアよりも上品な味わいだった。癖が無く、いくらでもいけそうだった。

「人間の肉がこんなに美味しいとわな」

一也が深い溜息を吐いた。

「果物と、ビールを餌にしていたせいかしら」

「肉の成分は、豚や牛とほとんど変わらないそうだから、餌や調理方法を工夫すれば美味しく頂けるということ

な」

「ねえ。見込み有りそうね」

「ああ。後は買手を探すだけだ」

「家畜が足りなくない？」

「ここから十キロほどのところに、女子大のテニス同好会の合宿所があるんだ。取りあえずは、そこで調達しよ

うと思っている」

### 第三章 スタジオ

工場の一角に作られたスタジオでは、三名の撮影スタッフが、準備に取り掛かっていた。加納と長老の二人が、スタジオの隅に置かれたベンチに腰掛け雑談を交わしながら様子を見ていた。

「もうすぐ撮影が始まりますよ」

「ここで殺すのですか？」

「はい、ここで捌きます」

白壁に、周囲を囲まれたスタジオの中央に設けられたステージでは、全裸に剥かれた真弓がうつ伏せになって、自慰を行っていた。真弓は、長老達の言いなりになれば、開放されると言われていた。逆らえば、惨たらしい拷問

の後に、処刑されることになっていた。衆知の中、自慰を強要されたが、逆らうことはできなかった。ビデオカメラが、サーモンピンク色の臍を、出入りする白魚のような指先を捉えていた。

「アヌスにも指を入れるんだ！」

長老が声をかけた。真弓の白い指先が、可憐な裏の蕾に吸い込まれた。

「ああ……。いい……。」

真弓の盛り上がった白い尻が妖しく、蠢き始めた。ステージ上に設置されたスポットライトが、極上の裸体を浮きあがらせた。工場長の楊が、赤色のハイヒールに網タイツを履き、股間に極太の張形を装着し、ボンデージの格好で、ステージに上がった。豊かな尻を振りながら、床に横たわる真弓に近付いた。盛り上がった乳房が、歩



くたびに揺ら揺らと、揺れ動いていた。右手には、短めの鞭を持ち、左手には、刃渡り三十センチはある大振り  
の肉切り包丁を持っていた。それらを床に置いた。前屈  
みになって、真弓の重たげな乳房を鷲掴みにした。

「うっ……」

真弓が低い呻き声をあげた。



楊が、真弓の髪を、鷲掴みにして、前のめりにさせた。

尻をカメラマンに向けるように調整した。楊は、持っていた鞭を頭上にあげ、振り下ろした。バシツという音がして、真弓の尻ではなく、床を叩いた。真弓の尻が一瞬、ブルツと震え、股間から尿が滴り落ちた。楊はカメラに写るように、真弓の尻を両手で割った。カメラは尿道から迸る尿を捉えていた。

勢いがおさまった頃、楊が膣に口を付け、尿を舐めた。真弓があげる嗚咽が聞こえて来た。楊は、ぐったりとした真弓の裸身を支えながら膣とアヌスに指先を、捻じ込み犯し始めた。

「ああ………。いい………」

真弓の盛り上がった白い尻が妖しく蠢き始めた。一度いかせるつもりであった。暫く指先で犯した後に、尻の

割れ目に顔を押し付け、舌先でアヌスを舐り始めた。愛液が止めなく滴り落ちた。

頃合いをみて、楊は真弓を四つん這いにさせて盛り上がった白い尻を、両手で鷲掴みにして、愛液が滴る臍に、張形の先端を押し付けた。ズブリという音を立てて、突き込んだ。

「ああ……」

真弓が背筋を、仰け反らせた。楊は、真弓のクリトリスを、右手で弄りながら、左手で豊かな乳房を揉みしだき、腰を前後に激しい勢いで動かした。

#### 第四章 狩猟

そこは、一也夫婦が住む山荘から、十キロほど離れた場所に位置していた。そこに通じる道は、一本の農道のみであった。白樺林に囲まれた洋風造りの別荘が建てら

れていた。建坪は百坪ほどで、総二階の造りになっていた。正面にはきれいに刈られた芝が貼られ、裏庭には、テニスコートが二面作られていた。

降り注ぐ、陽光の下では、逞しい身体つきをした四十年代始めくらいの管理人が、芝を刈っていた。

近くのスプリングクーラーが、断続的に水のシャワーを吹き上げていた。管理人の男が、作業の手を休め、遠くを眺めた。白樺林の梢の合間から、日高山脈が見えた。スプリングクーラーのシャワーに、陽光が交わり虹色の光を、発していた。

テニスコートでは、二十歳を過ぎたばかりの女達八人が、練習に励んでいた。皆、美しい容貌肢体を持っていた。テニスウェアから覗く、白い太腿が眩しかった。はちきれそうな胸は、若さを象徴していた。彼女達は、H

大のテニス同好会に所属しており、夏休みを利用して、観光がてらに別荘に滞在していた。

深夜0時過ぎ、一也が運転するトラックが、ヘッドライトも点けずに、その農道を時速二十キロ前後でのろろと進んでいた。助手席には、Tシャツにジーンズ姿の礼子が乗っていた。トラックは、別荘から五十メートル離れた地点で停車した。すぐ脇にはオニクルミの大木が、枝を広げていた。二人はトラックを離れ、別荘に向かい歩き始めた。一也は肩に、水平二連式のショットガンを掛け、荷物が一杯詰まったリュックを背負っていた。礼子は、腰のベルトに、刃渡り三十センチのハンティンダグナイフを差していた。別荘では、テニス同好会のメンバーが、各自の部屋で寝息を立てていた。一也は、鍵が掛かかっていない窓をあけた。音を立てずに内部に忍び込

んだ。リュックから取り出したガラス瓶の蓋を開け、透明の液体をタオルに染み込ませた。廊下を忍び足で、進んでいった。最初の部屋のドアをゆっくりと開けた。豆電球が、薄らと部屋の内部を照らし出した。部屋の片側に置かれたダブルベッドでは、二人の女達が抱き合うようにして、寝息を立てていた。二人とも一糸も纏っていなかった。

若い女の発するフェロモンが鼻腔を刺激した。股間が熱くなった。近付き、液体を染み込ませたタオルを、ひとりの女の口元に押し付けた。女の寝息がさらに深くなった。もうひとりの女にも同様な処置を行った。一也のズボンは、はちきれそうに膨らんでいた。端に眠っていた女を仰向けにして、太腿を押し広げ顔を押し付けた。風呂上がりの石鹸の匂いに混じり、若い女のすばらしい

香りが脳細胞を刺激した。むちちりとした尻を鷺掴みにして、膣を舐め上げた。クリトリスを、音を立てて吸いまくった。

もう我慢することはできなかった。歯を立て食い千切ろうとする衝動を押さえ込んだ。もどかしげにズボンを降ろし、女に覆い被さった。一気に挿入し、眠っている女の舌を吸いながら、腰を激しく前後させた。

その頃、礼子は、別荘の裏庭に面した一階の管理室で、床に仰向けに倒れた男のズボンを脱がせていた。近くの床には、エーテルを染み込ませたタオルが落ちていた。エーテルによって眠らされた管理人の男は、四十代前半でがっちりとした体躯の持ち主であった。礼子は町で何度か、男を見掛けていた。背が高く、渋味のある容貌をしており、好みのタイプだった。礼子は男のトラン



クスを引き降ろした。上着は最初に脱がせておいたので、男は素っ裸になった。両手は、手錠で後ろ手に拘束していた。胸板が厚く、黒々と日に焼けた全身は、筋肉に覆われていた。

礼子はごくりという音を立てて、生唾を飲み込んだ。股間の茂みと黒々とした男根に、目が釘付けとなった。おもむろに、大き目の男根を握り締めた。ゆっくりと摩り始めた。手の中で次第に、大きくなっていった。それは、見る間に屹立した。礼子は、パクリと男根を啜えこんだ。思う存分に吸い、舐めた。礼子は、男をこの場で殺すつもりであった。その前に十分、堪能することに決めていた。暫く、口腔性交を楽しんだ後に、全裸になり、男根の上に跨り腰を落とした。ズブリという音を立て、膣に啜え込んだ。膣は男根で完全に塞がれていた。

礼子は、目の前にある男の男根を、凝視していた。手の平に余るほど大きく、惚れ惚れするような色艶をしていた。竿の部分を左手で掴み、右手に持ったハンティングナイフを根元に当てた。ごくりと生唾を飲み込みながら、ナイフを持つ手に力を入れた。男は、猿轡の下から、低い呻き声をあげ、背筋を反らせ白目を剥いた。礼子の手には血塗れの男根が、握られていた。それをボールに入れ、今度は、睾丸を切除した。男は失神したのか、ピクリとも動かなかった。管理人室には、小さなキッチンが付いていた。礼子は、薄手のゴム手袋をはめ、シンクで、男根と睾丸を洗い、まな板に載せて、塩・胡椒をまぶした。ガスコンロで熱しておいた油をしいたフライパンに載せ、焼き始めた。すぐに香ばしい肉を焼く匂いが、立ち込めた。調理の間中、礼子はゴム手袋を外さなかつ

た。指紋を残さないためであった。三十分後、管理入室のドアが、荒々しく開けられた。肩に全裸の女を担いだ一也が、立っていた。

「礼子。女達を運ぶのを手伝ってくれ」

礼子は、テーブルに付いて、皿に盛った管理人の男根料理に、舌鼓を打っていた。

「もうちょっと待って。すぐに食べ終わるから。貴方もいかが？」

「俺、共食いはしない主義なんだ。雌豚専門でね。男を始末して来いよ」

一也は、床に倒れ、出血のために虫の息となっている管理人をちらりと見て出ていった。

礼子はすべて食べ終わると、ナプキンで口元を拭いて立ち上がった。ハンティングナイフを持ち、管理人に近

付いた。管理人の顔は、出血のために蒼白になっていた。

視線が、ハンティングナイフの光に注がれていた。

「貴方のおち\*ぽ最高に美味しかったわ。お別れね。名残惜しいけど」

言い終わらぬうちに、男の胸元にナイフを、根元まで刺し込んだ。男は、猿轡の下から、呻き声をあげながら、全身を震わせ、白目を剥いて、すぐに動かなくなった。

一時間後、礼子が、別荘の正面に、横付けにしたトラックの荷台から、一辺の長さが一メートルほどの木箱を下ろしていた。一也が、地面に置いた木箱に気を失った女達を、一人ずつ詰め込んでいた。合計八個の木箱を、荷台に積み直し、二人はトラックに乗り込んで、別荘を後にした。